

映画論『タイタニック』③ ——光の演出——

総合教育科 教授 和田 茂俊

救援を求める信号弾が打ち上げられた次の瞬間、画面は大きくロングショットに切り替わる。カメラは夜の広大な海を映し出し、そこに世界最大の豪華客船はあまりに小さく、ぼつんとともる信号弾は闇を照らす力もない。セリフはないが、この映像だけで、船に救援は来ないのだと観客にはわかる。ジェームズ・キャメロンの『タイタニック』には光による表現が効果的に使われている。

光が最も効果的に使われるのは、水没しはじめた船室からローズがジャックを救いだす場面である。盗みの疑いをかけられたジャックは、船室に手錠でつながれている。水はあふれていく。ローズは船室から廊下に出て「誰かいないの？」と叫ぶが、あたりに人の姿はない。人々は皆、甲板に上がったのか、手を貸す者はおらず、ローズは立ち止まる。そのとき、廊下の照明がすっと消え、ローズの顔は陰になる。数秒後、照明がつくと、再びローズは助けを求めはじめる。ここで光の明暗は、ローズの絶望と希望をわかりやすく観客に伝えている。

笑ってしまうのは、斧で手錠を断ち切ったジャックとローズが船底から脱出する場面である。ハリウッド映画といえば爆発シーンがつきものだが、船の沈没に爆発を入れるのは難しい。それでもむりやりに爆破シーンを作ってしまうのがハリウッドらしさだ。船底の二人に濁流が襲いかかり、二人は走って逃れようとする。これは火の代わりに水が使われた爆発シーンだ。点滅する照明が水流を爆破のように映し出すが、このとき音楽までも光の点滅にリズムを合わせている。演出がリアリズムを越える瞬間である。

それにしても、ジャックを演じるディカプリオはなんと魅力的なのだろうか。海面に降ろされていくボートからローズが見上げると、船端からジャックがやさしい目で見下ろしている。このとき画面には恋敵のキャルも含めて三人が映っている。ところが信号弾が上げられたとたん、ジャック以外はフレームの外に追放される。ジャック一人を映す画面の背景に、信号弾がちょうど花火のように開き、光はジャックのやさしい顔をきらめかせる。漫画で言えば王子様の背後に花が飛んだ状態である。これでジャックに惚れないとしたら、ローズは乙女じゃないのである。「飛び込む時は一緒よ。」救命ボートを降りるローズの重大な決心も、光の効果なしには生まれなかったかもしれないのだ。

(『紀伊民報』平成二八年五月一〇日)